

国際看護研究会 NEWSLETTER No.25

Japanese Society for International Nursing

2002.4.19 発行

国際看護研究会も発足して6年が経過しました。海外での看護活動を終えて帰国された方々でまだ当会の存在を知らない方も多くいます。皆様からどうぞ当会をご紹介ください。国際看護に興味・関心を持つ我々看護職の相互啓発、交流等のために、本年度も進んでまいります。

本号の内容は以下のとおりです。

I. 運営委員会報告	p. 1
II. ワーキンググループ報告	p. 2
III. 第5回学術集会実行委員会報告	p. 2
IV. 第24回国際看護研究会報告	p. 2
V. 第25回国際看護研究会のお知らせ	p. 5
VI. 第5回学術集会のご案内	p. 5
VII. 海外情報 ウィスコンシン大学留学記 (2)	p. 6
VIII. 皆様へのお願い・お知らせ (事務局より)	p. 8

I. 運営委員会報告

第21回運営委員会は、2月2日(土)に行われた。今後の研究会の予定、2002年度事業案、日本看護系学会連絡協議会加入等について検討が行われた。昨年の総会で委員の増員についての合意が得られたため、新委員として田中幸恵氏と丹野かほる氏が加わることになり、次年度運営委員役割分担を決定した。日本看護系学会連絡協議会については主に情報を得ることを目的としての加入について総会での賛同を得ているが、発足会での討議から同会は日本学術会議での活動を念頭に置いたものであり、本研究会の目指す方向と異なるのではないかということ、正会員8万円、準会員2万円の会費支払いが必要であり、それに見合うものが得られるかと意見が出、再度総会で審議することにした。また2001年10月に施行された著作権等管理事業法に伴う本会著作物の複写権処理方法について協議を行った。その結果、とりあえずNEWSLETTERには今後無断転載禁止を表示し、処理委託先については継続審議事項とした。

Ⅱ．ワーキンググループ報告

日本学術振興会の科学研究費の補助を受け、行っている「看護分野における国際協力活動の基準作成に関する研究」について定期的に打ち合わせを開催し、調査、資料収集、分析を進めている。平成 14 年度も引き続き行っていく。

Ⅲ．第 5 回学術集会実行委員会報告

小原真理子（日本赤十字武蔵野短期大学 助教授）大会会長の下、第 1 回準備委員会が 2 月 23 日（土）、第 2 回準備委員会が 4 月 6 日（土）に開催された。今後の準備作業の確認、各委員の役割分担等の決定や案内状発送などの作業を行った。

Ⅳ．第 24 回国際看護研究会報告

第 24 回国際看護研究会は、2002 年 3 月 16 日（土）に国際協力事業団青年海外協力隊事務局広尾訓練研修センターにおいて開催された。長年にわたり国際医療活動を行っている中村 哲先生をお迎えし、「パキスタン・アフガニスタンにおける 18 年間の国際医療活動」をテーマにご講演いただいた。

〈講師略歴〉

1946 年福岡市生まれ。福岡高校、九州大学医学部卒業。神経科医（現地では内科、外科も）。医療 NGO ペシャワール会（本部福岡市）現地代表、PMS（ペシャワール会・医療サービス）院長。

〈講演要旨〉

1984 年 4 月、パキスタン北西辺境州の州都ペシャワールに赴任、ハンセン病のコントロール計画を柱にした主に貧困層の仕事に携わる。1986 年からはアフガン難民のためのプロジェクトを立ち上げ、現在、アフガニスタン無医地区山岳部に 3 つの診療所を設立し、無料診療を行っている。これらの診療所の基地病院として、1998 年にペシャワールに 70 床の PMS を設立した。また山岳部に新たに 2 つの診療所を開設した。この基地病院の設立資金の 7 千万円はペシャワール会の寄付によってまかなわれた。2001 年 9 月現在、1 病院 10 診療所を持ち、患者を待つだけでなく辺境山岳部へも定期的に異動診療を行っている。

アフガニスタンは不幸な国である。ロシアの侵攻が終わり、北部のタリバン地域の一部を除き、東の間の平和の時を送っていたが大早魃に見舞われた。2005 年 5 月から 6 月にかけて、WHO をはじめとする国連機関が警告していた人類が体験したことのない早魃がユーラシア大陸に押し寄せてきた。その範囲はアフガニスタン・パキスタン・インド北部、中国、モンゴル、北朝鮮を含む 6 千万人の人が被災するという大規模なものであった。

その中でもアフガニスタンは最もひどい状態であった。国民2千万人のうち1千2百万人が被災した。不作の状態が2年続き、現在も同じ状態である。これにより飢餓線上にあるもの4百万人、餓死線上にあるもの百万人と発表された。しかし繰り返しの警告にも関わらず国際社会では話題にならなかった。人間、動物、植物を養っているのはヒンズークシ山脈の雪である。この雪が年々減ってきている。このため川の流れも少なくなっている。アフガニスタンで一番大きなカブール川は、普段では洋々と流れているが、歩いて渡れるくらい水が減ってきている。井戸水も枯れ、畑も不作である。不作は何年か我慢して雨が降り始めるのを待てるが、飲み水がなくては人間は24時間もたない。同じく2年前から赤痢の大流行があり、子ども達が次々と死んでいる。診療所では幼子を抱いた母親の姿が目立った。何時間も歩いて診療所にやってくるが、途中で子供が死亡し、時には外来で待っている間に母親の腕の中で子供の体が冷えていくこともある。その原因は飲み水がなかったからである。そのため農民は村を離れ、親族のいるカブール・ジャララバード、カンダハールへ移動した。これらの都市が旱魃避難民であふれるようになったのが1年半前である。「病気はあとで癒すから、とにかく生きてるように」との気持ちであった。村人を総動員して清潔な飲料水を得るという目的で、井戸掘りを各地域に広げていった。ジャララバードに拠点を置き、旱魃全地帯に事業を展開し、現在までの作業地合計700地区、そのうち9割で水を出し、百数十か村で30万人の命をつなげるようになった。

つぎに、地雷であるがロシア・アフガン戦争時にまかれたものが多いが、さらにアメリカがプラスチック爆弾を落としていった。地雷を作る人、まく人、撤去する人の3者で地雷の業者はまわっている。現在1千万発あるいは7千7百万発ともいわれている。かなり大量の地雷がある。今、撤去すべきである。地雷は貴重なものでこれを撤去し、この爆弾を井戸掘り作業に使う。診療所の職員の半数は元ゲリラなので爆発物の取り扱いに慣れている。このように地雷も平和利用に役立っている。明日からどこに逃げようかと思っていた農民が清潔な水を飲めるようになり、子供の下痢や病気がなくなるなど村全体が安心して生活できるようになりずいぶん感謝された。住民の笑顔に励まされ次々と拡大して、気づけば600本(井戸)を超えていた。さらに拡大を図り現在3年間で2000本の完成をめざしている。飲用水だけではなく灌漑用水も40カ所手がけ、そのうち30カ所で水が出た。そのころ餓死者はWHOの予想通り100万人を越えた。しかし食料援助が始まったのではなく国連の経済制度が始まり、首都カブールから外国人が姿を消していった。世界的に報道されたのは百万人の餓死者ではなく、バーミアンの仏像破壊であった。報道陣も写真を撮りにきたが、100万人の餓死者について尋ねた報道陣は一人もいなかった。アフガニスタンは追いつめられ首都カブールから外国人が逃げて行き、無医地区化していく状態であったため、急遽1年前に5カ所に臨時診療所を開設し、現在に至っている。

ニューヨークのテロ事件以後、アルカイダを匿っているとタリバンの攻撃が始まる。仏跡破壊の時期からタリバンの非難という筋書きができていたが、これを契機に世界的にタリバンを潰せという世論が沸き起こり現在に至っている。我々が恐れたのは餓死である。

カブール市民の1割は冬を越せない。そこで小麦4千トンを送る計画を立てた。実際に届いたのは千4百トンであったが、これで十数万人の市民が冬を越せた。

タリバンは何でもないただの治安部隊であった。最もきれいな政権であった。タリバンから賄賂を要求されたことは一度もなかった。タリバンがいる限り、秩序は整然としており、空爆下でも食料配給はできた。これによって十数万人の口に食料が届いた。アフガニスタンではいろんなことがあり、退屈はしないが最近少々疲れてきた。アフガニスタンは外国人には理解しにくい、「行ってみないとわからない国」の一つであろう。2週間前の時点で、街に乞食があふれていたが援助らしいものは何一つ始まっていなかった。

タリバン政権の崩壊により全国は無秩序になった。決して新聞で見るものは実情ではない。無政府状態である。何が開放されたかといえば売春の自由、強盗殺人の自由、麻薬栽培の自由である。これによってアフガニスタンは最悪の状態に陥っているといっても過言ではない。物価が上がり、外国人が異様な目つきで市内をパトロールし、今からアフガニスタンの苦難が始まった。空爆によりとんでもないことをしてくれた。取り返しのつかないことをしてくれたというのが実感である。だからといって人々が暗い顔をしているのではなく、むしろ成田で見る日本人の方が暗い顔をしている。日本では年間3万人の自殺者があるようだが、アフガニスタンでは百万人の餓死者が出ても、自殺するということはほとんど見たことはない。なぜか？これは私の想像であるが、人間は一般的に持てば持つほど暗くなってくる。金、物、地位、いい生活を守ろうとすればするほど暗くなってくる。「何も持たない人の楽天性」は確かにあるのではなかろうか、と思っている。

18年間を通じて、今振り返って思うことは、現地に出かける動機の中に、皆の役に立てればという気持ちはあったけれども、今振り返ってみると現地での活動をするによって、実際は助かってきたのは自分たちではなかったかと、思っている。楽しいことばかりではなかったが、いろんな形で人間らしい人間を見てきたよう気がする。

日本に帰って思うことは、日本人に言うのは失礼だが、人間のにおいがしない。何となく表面がきれいで、スムーズにいろいろ流れているようで、その実、本当に人間らしい感じがしてホッとするというのは、やはりアフガニスタンに行ってからである。そのことを考えると我々が人助けのために何かをするというのではなく、このように困った時に助け合うということが、一つ自然な人間の生き方ではないかと思っている。

日本では、よく人に「先生、そんなところまで行かなくても、日本にだって離島問題があるでしょう」と言われるが、私はアフガニスタンが気に入っている。国際協力団体とは思っていない。九州とアフガニスタンしか知らない。たまたま縁で現地で活動ができています。国際援助でソマリアに行き、バングラデシュに行き、ユーゴスラビアに行き、コソボに行き、そしてどうであったかなどと議論するのが国際援助ではない。国際援助という言葉が必要なのかと私は思う。たまたま縁があつてアフガニスタンに赴いて、目の前にぶら下がっている課題と取り組んでいるうちに18年が過ぎたということだ。

我々にできることは「一隅を照らす」ということであり、全体を照らすことはできない。

自由と思いながらもいろんな制限の中で暮らしている。日本人であるという制約、ある職場にいるという制約、男であるという制約、女であるという制約、年齢という制約、我々の一生は必ず死が待っているという限られた中で生きているという制約、この平成14年に我々が生きているという制約・・、いろんな制約の中で暮らしている。そして、この限られた中で自分ができることは何かを常に問いながら、その場その場で、持ち場持ち場で力いっぱい、この力を尽くしていくことではないかと思っている。

あっという間に18年が過ぎたが、日本人の良心の仕事として今後も継続していきたいと思っている。

(文責 丹野)

著者紹介：「ペシワールにて」「ダラエ・ヌールへの道」「医は国境を越えて」

「医者とは井戸を掘る」(石風社)

「アフガニスタンの診療所から」(筑摩書房)

「ドクターサーブ 中村哲の15年」(丸山直樹 石風社)

V. 第25回国際看護研究会のお知らせ

タイでのエイズ教育、性教育を通して医療人類学の研究に携わっておられる道信良子^{みちのぶ}先生に、現地での事例をもとにご講演していただきます。奮ってご参加ください。

日 時：2002年6月15日(土) 13:00～15:00

会 場：国際協力事業団青年海外協力隊事務局広尾訓練研修センター

テーマ：「医療人類学と国際看護」

講 師：道信良子^{みちのぶ}氏 (札幌医科大学 保健医療部)

VI. 国際看護研究会第5回学術集会のご案内

会員の皆様のお手元には、既に学術集会の案内状が届いている事と思いますが、以下の日程で開催いたします。ぜひ多くの会員のみなさまにご発表、ご参加いただきますよう、お待ちしております。

日 時：2002年9月14日(土) 9:30～17:00

会 場：国際協力事業団青年海外協力隊事務局広尾訓練研修センター

東京都渋谷区広尾4-2-24

プログラム：基調講演 学術集会会長 小原真理子(日本赤十字武蔵野短期大学助教授)

ワークショップ

一般演題(口演)

参加費：会員2000円(学生1000円)

非会員 3000 円（学生 1500 円）

参加費には抄録代が含まれています。

参加費振込み先：00260-1-29431 国際看護研究会学術集会

研究会の年会費振込先とは異なりますので、ご注意ください。

演題募集要領：テーマは国際看護に関する研究、または活動実践報告です。申し込み締め切りは 7 月 15 日（月）必着です。詳しくは、下記までお問い合わせください。

問合せ先：〒180-8618 東京都武蔵野市境南町 1-26-33

日本赤十字武蔵野短期大学 長谷部 史乃

お問い合わせはなるべく FAX か E-Mail でお願いします。

VII. 海外情報

ウィスコンシン大学留学記（2）

アメリカ合州国ウィスコンシン大学マジソン校

看護学部 博士課程 根本恵子

私は現在、米国ウィスコンシン州立大学看護学部博士課程に在籍している。レポート二回目の今回は、看護学部修士課程を経て博士課程への進学を決意するまでの経過について書く。前回予告した、研究室の手伝いを通じてかかわっている季節農業労働者の話題については、紙面の都合上次回にしたい。

さて、あれは約 4 年前のことである。個々に来る前に、私は福岡の看護短大に勤務していた。その短大の学長が私に、はなむけの言葉として「アメリカの大学に入るのは簡単だが、出る（卒業する）のは大変と聞いております。根本先生もせいぜい頑張ってください」とおっしゃられた。学長先生はアメリカで医師として研修を受けられたことがある、（自称）アメリカ通でいらっしゃるから、多分この話は本当なのだろうと私は思った。でも、簡単といってもどう簡単なのかわからず、私は、励ましとも戒めともとれる学長の言葉を軽い気持ちで聞いていた。だが、ここに来てみて確かに学長の言葉は的を射ていると、時々思うことがある。

米国の大学では、英語を母語としない外国人に対し、英語力を測るための TOEFL テストがミシガンテストのスコア提出を求める。私が目指していたウィスコンシン大学看護学部大学院修士課程の入学基準は TOEFL のスコアが 550 点だった。しかし私の場合、入学申請書類の添付した TOEFL の点が 535 点だったにもかかわらず、入学が認められたのであった。大学が言うには、535 も 550 点もそう大きな違いはないでしょう、それに、授業に出ているうちに英語力もついてくるでしょう、ということだった。この杓子規定でない

大学の対応には凄く驚いた。同時に私は、学長先生がおっしゃられた簡単という言葉の意味を改めて思い知った気がした。

「英語」という言葉の壁を抱えながらではあるが、私は大学院の授業に出るようになった。ただ、大学院進学が夢が叶った喜びも束の間、とにかく授業についていくのが大変で、毎日が試練の連続へと化してしまった。特に「英語」にはほとんど手を焼いた、英語力を向上させるには、英語で聞いて英語で理解し、英語で答えるのが最も効率的と聞いていた。だが私の場合、英語で聞いたことをいちいち日本語に直して考えるので、理解するのに時間がかかって仕方がなかった。また、自分の意見を人に話すときは、恐ろしく発音の悪い英語で話すので、今度は相手が私を理解するのに時間がかかった。とにかく何をするにも異常に時間がかかる。単位を落とさないように、アメリカ人学生の2倍は努力しようと思ったりしたが、アメリカ人だっていい成績を取るのに必死である。外国人と競争しようと思うこと自体、大きな間違いだと思うようにした。自分は自分。そう自分に言い聞かせることで、英語のできないことの障害を乗り越えることにした。

そうこうするうちに、私は修士課程修了後のことを考える時期にいた。以前日本の大学院で履修した科目の単位読み替えが認められたこともあり、2年かかるところを1年半で課程を終えることになったのである。卒業したら何をしよう？私自身といえば、移民女性の健康に興味があったので、もっとそのことについて深く勉強してみたいと思っていた。でも、希望はあるものの、こんなまともに英語を操れない状態で博士課程に行けるんだろうかと、そっちの方の不安が大きかった。色々考えた末、自分のやりたいことに挑戦しないで諦めるよりは、やってから諦めようと思うことにした。ふと周りをみると、他の留学生達は博士課程への進学を目指して着々と情報を集めている。その友達等から励ましを受けたこともあり、いよいよ私も博士課程に応募してみようかなという気になってきた。しかし、心配しなければいけない問題は山ほどあった。特に授業料を払うのにどうやってお金を工面していいのかについては、本当に困った。既に修士の授業料を自費で賄った私は、年間200万以上もする授業料にこれ以上つぎ込む余裕がなかったのである。

米国では、修士や博士課程に在籍する大学院生のほとんどは、研究計画書を出したりして機関から助成金を貰ったり、財団等から奨学金をもらうか、あるいは、教授の研究を手伝う研究補助学生（リサーチアシスタント）、または講義をしたりといった授業を手伝う授業補助員（ティーチングアシスタント）として給料をもらう、特に教授の下で研究の手伝いをする、授業料も払ってもらえるので自ら払う必要もない。私の第一の希望は、できれば手伝いといったことはしないで勉強にだけ集中することであった。講義についていくだけで精一杯なので、勉強の傍ら人の手伝いをするなどかなりの芸当に近いと思えた。そこで、日本で入手可能な奨学金の応募資格を見てみた。だが、残念なことに既に海外の大学院で学ぶ者は該当しないという条件ばかりだった。次に私が選んだ可能性では、教授の研究を手伝う研究補助学生になることであった。（英語で）アメリカ人に授業をするなんて考えられなかったから、これしか道はなかったともいえる。とはいうものの、補助員

の口を探すには、自分が興味をもつ分野と、自分を雇ってくれる教授の研究内容が同じ分野であることが重要であった。ここ看護学部には在籍する大学院生のほとんどは、その国の政府から奨学金をもらってきているアジア諸国からの留学生を除いて、自分の研究を指導していく指導教官の下で研究補助員として仕事をしながら勉強している。多くの学生は、仕事を通じて教員から研究に関する意義や方法論、あるいは研究過程を学び、それらの知識を自分の論文作成に活かしているようだった。(これらの制度については、他の大学と少し違うかも知れません。興味のある方や情報を求めている方、インターネットなどで更なる情報を得られることをお勧めします)。しかし私の場合、自分の興味に関連した分野の研究、例えば移民女性を対象とした看護や途上国での地域看護活動をなさっていた先生にはなかなか出会えなかった。白人の人口の多いウイスコンシン州で、移民に関する研究をする教員の数に極めて限られていたからである。勉強を続けるには、とにかくお金がないと話にならない実感したのもこの時である。政府から奨学金をもらっている、留学生の友人等が羨ましくてならなかった。

(次回につづく。)

VIII. 皆様へのお願い・お知らせ(事務局より)

1. NEWSLETTER の「海外情報」欄の記載事項を募集しております。会員の皆様の活動報告、活動国の様子、医療事情あるいは旅行記など海外に関する記事をお待ちしております。事務局までお送りください。
2. 参加者の方からのご意見を反映して研究会の活動のさらなる改善を図りたいと思います。講演会のテーマ、NEWSLETTER についてなど何でも結構ですので、本会へのご意見をお聞かせください。
3. 新年度となりましたので、2002 年度の会費 2000 円の納入をお願いいたします。2001 年度会費未納の方は合わせてお振込み下さい。封筒の宛名の名前の後に会員番号と () 内に最終支払い年度が記されています。なお会員以外で NEWSLETTER のみ購読希望の方(研究会に参加の際は非会員扱い)の購読料のお支払いもお願いします。
4. 新年度となり転居された方も多いと思います。事務局にも住所変更のご連絡をお願い致します。
5. 現在ホームページを更新中です。新しい URL は次号にてお知らせいたします。

編集後記:

米国留学中の根本さんの海外情報の記事を身の引き締まる思いで読ませていただいた。言葉・文化の壁が厚いなかでは、大変な努力なしでは勉学を修めることは困難だろうと想像している。そのような状況で「諦めるならまず、やってきてから」という前向きな決断をされたことは大変立派だ。自分だったらどうするだろうか…。勇気と元気をいただいた。

(田中)

アメリカ合衆国に行ってきた。出入国の際の検査が厳重で、帰国時には 300m ほどの列に並んで手荷物検査を受け、多くの乗客が搭乗時間に間に合わず離陸の遅延が続いた。まだまだ緊張が続いている状態であることを実感する経験だった。アフガニスタンは復興に向かっているが、イスラエルにおける暴力の連鎖はとまらずにいる。一般市民の生活を脅かす状況が早く解決することを祈る。(伊藤)

中村先生の講演は、アフガニスタン人の視点から見た世界観、援助観を示していただいた。力ある者は情報をも制し、私たちも力ある者の論理に乗っ取って正義を唱えるが、その正義の危うさを教えられた。Maginalize された人々と共に生きる者にしか語れない言葉を聞いたように思う。(柳澤)

駐日ホンジュラス大使が 4 月末に離任されることになった。1 年半ほど前、もしホンジュラスのサッカーチームがワールドカップに出場することになったら、日本に大使として転出を希望する者が続出して、自分は帰国しなければならなくなると心配していた現実が本当になってしまったのかもしれない(残念ながらホンジュラスチームは予選で敗退してしまったが)。こんな所にもワールドカップの影響が及んでいる。(森)

国際看護研究会連絡先(事務局)／NEWSLETTER 発行元

年会費郵便振り込み先：口座番号 00150-6-121478

ニュースレターの記事に関して無断転載を禁じます。

皆様のご理解をお願いいたします。